

(対象事業： 申請した対象事業区分1～3のうち該当するもの)

事業名：現代の写真3 ノンセクト・ラディカル

事業者名：横浜美術館(財団法人横浜市芸術文化振興財団)

連携事業館名：なし

住所： 横浜市西区みなとみらい3-4-1

TEL： 045-221-0300

FAX： 045-221-0317

HPアドレス： www.art-museum.city.yokohama.jp



①施設概要

横浜美術館は、平成元(1989)年3月に、まず横浜博覧会のパビリオンのひとつとして開館し、博覧会終了後改めて11月に横浜美術館として正式に開館。設計は丹下健三。作る、学ぶ、見るを軸とし、コレクション展の開催、企画展の開催、コレクションを中心とした調査、研究、情報センターにおける蔵書等の公開、子供、成人向けのワークショップの実施などを行っている。

②事業の意図目的

本展のタイトル「ノンセクト・ラディカル」は、60年代末から70年代の初めにかけて、我が国で盛んに使用された和製英語で、当時激化していた学生運動をはじめとする政治運動の中にあって、運動組織＝セクトに属さず、かといって政治に無関心でないばかりかむしろラディカルな姿勢で社会問題に取り組むことを指している。ここでは、そうした態度に見られる現実への取り組みを、参加作家の作品を通して今一度捉え直そうとするものである。イデオロギーなき時代を迎えたまま新たな世紀に入らる中で、わたしたち一人ひとりの価値判断の重要性がとわれようとしている。現実の世界を素材とする写真や映像の作品においても、作家が如何に同時代の現実と向き合うかといった態度そのものが、真摯に問われるべき課題となっています。ここで紹介する作品には、政治的なメッセージが直接込められているわけではありませんが、そこには様々な文脈が流れています。こういった文脈を引き出すか、まさに作品との対話によって得られる場を組織するのも、ここでの狙いの一つとなっています。

③事業概要

本事業は、国内外の美術作家8人の写真、映像作品、合わせて240点余から構成される展覧会である。それぞれの作家の持つテーマを鑑賞者との間で共有することで、一過性のジャーナリスティックに伝えられている時事的な問題を表現として捉え、伝えようとするその姿勢を見てもらおうとするものである。会期中、アーティストのレクチャーを行い、聴衆との間の質疑応答を行ったことで、ともすれば表現の中に隠れがちな作品の本質を明らかにすることが出来た。会期中行った展覧会に関連した事業は、以下の通り。

関連事業：

1. アーティスト・トーク

本展出品作家が、スライドなどを交えながら自作について語ります。

7月18日(日)

14:00- 15:30 米田知子

16:00- 17:30 アハラム・シプリ(通訳付き)

9月4日(土)

14:00- 15:30 スティーヴ・マックイーン

9月19日(日)

14:00- 15:30 石川真生

16:00- 17:30 デイヴィッド・クレルボ(通訳付き)

9月20日(月・祝)

14:00- 15:30 露口啓二

16:00- 17:30 奈良美智

会場：横浜美術館円形フォーラム(入場無料・100席)

※13:30より開場します。

2. 記念講演会

8月1日(日)14:00- 15:30 (開場 13:30)

講師：倉石信乃(横浜美術館学芸員)

題名：地名と現代写真

会場：横浜美術館レクチャーホール(入場無料／定員 240名)

8月15日(日)14:00- 15:30 (開場 13:30)

講師：天野太郎(横浜美術館学芸係長)

題名：アーティストのアティチュードについて

④事業の製作物及び報告書等

該当するものを選んでご記入ください。

事業の製作物 テキスト ワークシート その他 ()

作成した報告書等 展覧会図録

ビデオ ()

冊 子 ()

その他 ()

⑤参加者状況

参加者人数 延べ18,000人

内 訳

参加者人数,それぞれの内訳を年齢層など可能な範囲で記入してください。

小学生・中学生 3800人 高校生・大学生 7500人 大人 8700人

（報告書）

（１）事業の実施状況について

・日ごろ馴染みの深い写真を表現メディアとしてとりあげ、そのに普段注がれることのない各作家独自のまなざしを広くしらしめることで、写真表現の可能性を探ることを目的とした。イギリス、パレスティナ、アルバニア、日本、ベルギーの作家によって構成された本展は、世界の写真動向を概観する規模ではなにか、ユニークな表現、あるいは知らされることのなかった真実に鑑賞者の興味がより注がれることとなった。

（２）地域との連携について

各作家を招いて行われたアーティスト・トークは、ともすれば難解になりがちな写真、映像表現の本来的な意味を伝える絶好の機会となり、それぞれ５０～８０名の聴衆者からも熱心な質問が寄せられ、国際的な交流が果たせたことのみならず、今まで気がつかなかった表現を知りえたことで、当館のワークショップなどで、写真講座に積極的に参加し、自らも新たな表現を行う意欲も見られた。

（３）成果物について

展覧会図族（現物を参照）を編集、出版した。

（４）参加者の反応

新聞テレビなどで伝えられない、歴史的な事実、真実について、開眼させられた、といった意見が多く見られた。また、アーティストから直接話が聞けたことで、作品をより深く理解出来たといった意見も見られた。

（５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

これらのことを受け、地域社会、あるいは来館者にたいして一方通行ではなくインタラクティブな関係が形成されたことがもっとも特筆すべき効果であった。

(6) 新聞記事等

○新聞記事

神奈川新聞	2004年3月22日、7月10日8月6日
日本経済新聞	2004年7月10日
東京新聞	2004年7月15日
読売新聞夕刊	2004年7月22日
週刊朝日	2004年8月6日
信濃毎日新聞	2004年8月3日
アサヒカメラ	2004年 9月号
美術手帖	2004年11月号
朝日新聞夕刊	2004年8月11日
ヘラルドトリビューン	2004年8月20日